

日本語のスピーチレベルシフト実例分析 —ドラマスクリプトを用いて—

ユン・ドンゲン

要旨

日本語学習者にとって、「敬語」が難しい最大の理由はそれが規則的なものというより語用論的なものであるためである。本稿では、スピーチレベルシフトの実態をドラマのスクリプトを用いて記述した。その結果、「ダ体→デスマス体」「デスマス体→ダ体」のいずれにおいても、「動かす」目的よりも「伝達」目的の方が、「垂直関係」よりも「水平関係」の方が、「継続的」な場合よりも「一次的」な場合の方がスピーチレベルシフトが起こりやすいことがわかった。

キーワード：敬語、相対敬語、スピーチレベルシフト、デスマス体、ダ体

1. はじめに

敬語文化が存在する国で正しい敬語の使用は人間関係を円滑にするだけでなく、それを使う人の人格と教養水準の基準ともなる。特に、意志疎通でもっとも重要とされる人と人との間の礼儀と配慮は敬語表現によく現れる。敬語表現は誰にどのような場合にどのように使用するかによって表現の形も変わってくるので正しく敬語を使用することはとても難しいことである。

文化庁が実施した、日本人に「日常生活でどの程度敬語を使っているか」と尋ねた調査項目1では、「いつも使っている」と17.3%、「ある程度使っている」と56.6%、約70%を越える人が敬語を使用していると答えている。なお、同調査で、「敬語使用の際難しさを感じているか」と尋ねた調査項目2に対しては「よくある」が23.6%、「少しある」が43.9%で、約67%の過半数を越える人が難しさを感じると答えている。敬語の使用に難しさを感じる理由については、「相手や場面に応じた敬語の使い方」と答えた人が78.4%を占め、その他にも「手紙などを書く時の敬語の使い方」、「敬語について理解したり覚えたりすること」との答えもあった。

興味深いのはこの調査が日本人に対して行われたものであるということである。日本語を母国語とする日本人も半分以上が難しく感じている日本語の敬語使用は日本語を始めて学ぶ外国人学習者にとって漢字とともにとても難しい学習項目の一つになっている。

難しいからといって敬語を後回しにすることも望ましくない。日本社会において敬語の使用は必須であると言っても過言ではない。実際に上の調査にも現れているように実生活で敬語を使っている人は、もちろんその頻度や調査対象のような要因によって少し誤差は生じ得るが、約70%以上に至っている。日本社会においての敬語の重要性は文化庁が2007年に発表した「敬語の指針」においても力説されている。

日本社会において、そして日本語において敬語は確かに重要である。しかし外国人学習者にとって日本人の敬語使用習慣を理解することは難しい。それは日本の敬語が規則的で

はなく、心理・状況による見えない抽象的な要因に左右される「相対敬語」であるからである。単に言語を学ぶという側面だけを考えると、文法や語彙のルールさえ覚えれば駆使することができるようになるかもしれないが、より上の段階で日本の敬語をうまく駆使できるようになるということは、単なる暗記だけではなく、日本社会、日本人の生活習慣、文化など様々な要素への理解を伴わなければならない。筆者も外国人の立場で日本語を学習しはじめたころ、日本人の敬語使用習慣が人それぞれであり、場合によっても変わったりしてとても紛らわしかった経験がある。長い間日本で生活してきてその紛らわしさは徐々になくなってはいるが未だに難しさを感じている。しかし、確かなのは実際に日本人が敬語をどのように使用しているかを直接経験し、真似し、そのニュアンスを理解するのが日本語の敬語の理解に一番役立つということである。そのため、本稿では外国人学習者が効率よく日本語の敬語の学習ができるように、文法的な側面ではなく、実際行われた会話の例を提示・分析し、日本人の敬語使用の理解に役立つ実用性の高い資料を作成することを目的とする。

2. 研究方法

日本人が実生活でどのような人間関係の中でどのような敬語使用をしているかを観察するためには、長期間に一定の状況と関係を複数設定し、観察を続け、期間別の変化を分析したほうがより正確で現実性の高い結果を導出することができるであろう。しかしそのような研究方法是時間的制約があるため、本稿では日本で放映されたドラマをもって日本人の敬語使用を分析することにした。本稿では「実生活に近い敬語の観察ができる」・「現在使われている敬語の観察ができる」・「作家の男女比のバランスをとる」・「東京出身もしくは東京居住の作家の作品に限る」という条件を満たす作品、4編を以下の表のように採択し、ドラマの中でスピーチレベルシフトが行われたシーンをすべて収集する。次に、それぞれのシーンをスピーチレベルシフトの方向、目的、話者の属性、状況、継続性の五つの観点から、分類を行い、日本語のスピーチレベルシフトの特性について観察を行う。

タイトル	制作年度	脚本家	ジャンル	期待される場面
ドラゴン桜	2005年	秦建日子（はたたけひこ）／1968年生／男性／東京都出身／早稲田大学（東京所在）	学園ドラマ	友達、学校生活等
白夜行	2006年	森下佳子（もりした よしこ）／1971年生／女性／大阪府出身／東京大学（東京所在）	ドラマ	上下関係、恨み等
いま、会いにゆきます	2005年	篠崎絵里子（しのざきえりこ）／1970年代と推定／女性／神奈川県出身／横浜国立大学（横浜所在）	ドラマ／ロマンス	恋愛、愛情、家族等
薔薇のない花屋	2008年	野島伸司（のじま しんじ）／1963年生／男性／神奈川県出身／中央大学（東京所在）	ドラマ	日常生活、隣人住民等

3. 本稿で扱う敬語と非丁寧語の範囲

本稿では日本人がどのような場合に敬語もしくは非丁寧語を使うかを観察する。そのためには何を敬語とみなすか、何を非丁寧語と見なすか定義する必要がある。

筆者が本稿で重点を置きたいのは外国人学習者が相手に対して「どのような場合に」、「どのように言いたい時に」、「どのような関係に」敬語もしくは非丁寧語を使えば良いかという悩み解決することであるため、「致す」・「まいる」・「為す」のように特別な語彙が使われる場合だけではなく、「です・ます」で終わる文章を含む、相手に対して「非丁寧体を使わないすべての文体」を敬語体を使っていると定義する。それを以下「デスマス体」と呼ぶことにする。なお、それと逆に、「です・ます」が付かず、文が動詞のまま終わる文体や「ーダ」で終わる文体を非丁寧語と見なし、以下では「ダ体」と呼ぶことにする。

4. 日本人の敬語行動の実例分析

上で選定した4編のドラマ台本を分析し、合計51種類のスピーチレベルシフトのシーンを収集することができた。このデータに基づき、任意の基準をもうけ、分類しながら特徴を調べる手順で研究を進めていく。

本稿では大きい分類基準として「スピーチレベルシフトの方向別分析」、「スピーチレベルシフトの目的別分析」、「話者の属性（関係）によるスピーチレベルシフトの分析」、「会話が行われる場面によるスピーチレベルシフトの分析」、「スピーチレベルシフトの継続性の分析」の5つを設定した。「スピーチレベルシフトの方向別分析」は会話でダ体ベースの文体が続いているなかいきなりデスマス体になるような「文体が変わること」に着目した分類法であり、同じ方向にどのようなスピーチレベルシフトがよく行われるかを調べるために設けている。「スピーチレベルシフトの目的別分析」はスピーチレベルシフトには特別な目的がある場合があり、その目的が同一である際、スピーチレベルシフトはどのように行われるかを調べるための分類法である。「話者の属性（関係）によるスピーチレベルシフトの分析」は属性が同じならいつも同じスピーチレベルシフトが行われるかを調べるための分類法である。「会話が行われる場面によるスピーチレベルシフトの分析」は同じ状況にあったらどのようなスピーチレベルシフトが起るかを調べるための分類法である。「スピーチレベルシフトの継続性の分析」は一時的に行われるスピーチレベルシフトと常に行われるスピーチレベルシフトにはどのようなものがあるかを調べるための分類法である。

4.1 スピーチレベルシフトの方向別分析

スピーチレベルシフトを文体という観点から接近するとその分け方は2つに限られる。それは「ダ体→デスマス体」と「デスマス体→ダ体」である。

4.1.1 ダ体→デスマス体

総51種類のシーンの中「ダ体→デスマス体」方向のスピーチレベルシフトが行われたシーンは21個（総シーン数比45%）であった。

分類基準	目的		属性				場面		継続性	
			心理		社会					
	相手に 伝達	相手を 動かす	親密	疎遠	水平	垂直	平常	異常	一時的	恒常的
基準別シーン 数	20	3	18	5	12	11	12	11	22	1
比率	87%	13%	82%	18%	52%	48%	52%	48%	96%	4%
	100%		100%		100%		100%		100%	

(表1) 「ダ体→デスマス体」方向のスピーチレベルシフトが行われたシーンの各基準別比率

4.1.2 デスマス体→ダ体

総 51 種類の場面の中「デスマス体→ダ体」方向のスピーチレベルシフトが行われたシーンは 28 個（総シーン数比 55%）であった。

分類基準	目的		属性				場面		継続性	
			心理		社会					
	相手に 伝達	相手を 動かす	親密	疎遠	水平	垂直	平常	異常	一時的	恒常的
基準別シーン数	25	3	11	17	20	8	21	7	22	6
比率	89%	11%	39%	61%	71%	29%	75%	25%	79%	21%
	100%		100%		100%		100%		100%	

(表2) 「デスマス体→ダ体」方向のスピーチレベルシフトが行われたシーンの各基準別比率

4.1.3 分析

スピーチレベルシフトを「ダ体→デスマス体」と「デスマス体→ダ体」に分けて分析した結果、次のような結果が出た。

両方向とも、

- ・「目的」を基準としてみると「伝達」目的の場合のほうが「動かす」目的の場合より多くスピーチレベルシフトが行われた。
 - ・「心理的属性」を基準としてみると「疎遠関係」より「親密関係」である際に多くスピーチレベルシフトが行われた。
 - ・「継続性」を基準とすると「恒常的」より「一時的」なスピーチレベルシフトが多かった。
- しかし、
- ・「社会的属性」においては、「ダ体→デスマス体」方向のスピーチレベルシフトでは「垂

直関係」と「水平関係」両方ともほとんど同じ比率でスピーチレベルシフトが行われたのに対して、「デスマス体→ダ体」方向のスピーチレベルシフトでは「垂直関係」より「水平関係」である際に多くスピーチレベルシフトが行われた。

- ・「場面」においては、「ダ体→デスマス体」方向のスピーチレベルシフトでは「平常」と「異常」両方ともほとんど同じ比率でスピーチレベルシフトが行われたのに対して、「デスマス体→ダ体」方向のスピーチレベルシフトでは「異常」より「平常」である際に多くスピーチレベルシフトが行われた。

4.2 スピーチレベルシフトの目的の分析

スピーチレベルシフトには「親密感を感じさせるため」、「相手の機嫌を損なわないため」、「尊敬を表すため」、「何かを頼むため」のような目的がある。目的には人間が考えられる数えきれないほどの種類がありうるため、本研究では自分の考えや気持ちなどを知らせるだけの「伝達」目的と、相手に何かを求めるもしくは相手を変えるための「動かす」目的の大きく2つの基準をもうけて考察することにした。なお、それぞれの基準には頼む、怒りのようなそれぞれの項目をもうけているが、考えられるケースはとて多いため、本調査で扱った51個のシーンに出てきたケースだけを対象にしている。

4.2.1 伝達

4.2.1.1 ダ体→デスマス体

総51種類のシーンの中、「伝達」を目的としながら「ダ体→デスマス体」方向に行われたスピーチレベルシフトは20個であった（総シーン数比39%）。

分類基準	拒否	楽しさ	ごまかし	怒り	真剣	感嘆	業務的	安心	強調	断固	ふざけ	悔しさ	丁寧さ
項目別シーン数	0	2	1	4	7	0	1	1	0	1	2	0	1
比率 (%)	0	10	5	20	35	0	5	5	0	5	10	0	5

(表3) 「伝達」目的で「ダ体→デスマス体」のスピーチレベルシフトが行われたシーンの項目別整理と比率

4.2.1.2 デスマス体→ダ体

総51種類のシーンの中、「伝達」を目的としながら「デスマス体→ダ体」方向に行われたスピーチレベルシフトは26個であった（総シーン数比51%）。

分類基準	拒否	楽しさ	ごまかし	怒り	真剣	感嘆	業務的	安心	強調	断固	ふざけ	悔しさ	丁寧さ
項目別シーン数	1	9	0	9	1	1	0	0	2	1	1	1	0
比率 (%)	4	35	0	35	4	4	0	0	8	4	4	0	0

(表4) 「伝達」目的で「デスマス体→ダ体」のスピーチレベルシフトが行われたシーンの項目別整理と比率

4.2.2 動かす

4.2.2.1 ダ体→デスマス体

総 51 種類のシーンの中、「動かす」を目的としながら「ダ体→デスマス体」方向に行われたスピーチレベルシフトは 4 個であった（総シーン数比 8%）。

分類基準	注目させる	頼む	脅かす	喧嘩する
項目別シーン数	1	2	1	0
比率	25%	50%	25%	0%

（表 5）「伝達」目的で「ダ体→デスマス体」のスピーチレベルシフトが行われたシーンの項目別整理と比率

4.2.2.2 デスマス体→ダ体

総 51 種類のシーンの中、「動かす」を目的としながら「デスマス体→ダ体」方向に行われたスピーチレベルシフトは 1 個しかなかった（総シーン数比 2%）。

分類基準	注目させる	頼む	脅かす	喧嘩する
項目別シーン数	1	0	0	0
比率	100%	0%	0%	0%

（表 6）「伝達」目的で「デスマス体→ダ体」のスピーチレベルシフトが行われたシーンの項目別整理と比率

4.2.3 分析

「伝達」を目的とするスピーチレベルシフトが「動かす」を目的とするケースより圧倒的に多く行われていた。それを見れば、日本人は自分の感情を伝えたり、親密感を伝えたりするためにより多くスピーチレベルシフトを使用していることがわかる。

4.3 話者の属性（関係）によるスピーチレベルシフトの分析

スピーチレベルシフトに影響する要素には属性の問題も考えられる。本稿では属性を「心理的属性」と「社会的属性」と分けて考えることにする。「心理的属性」は話者が相手を親しく感じる「親密関係」であるか、相手を気まづくもしくは難しく感じる「疎遠関係」であるか、という距離感を基準とした区分法である。「社会的属性」は友達や他人のように相手を拘束したり、相手に従属したりしない「水平関係」であるか、親子や兄弟のように相手と上下関係がはっきりしたり、命令に従う部下であったりする一方に従属するような「垂直関係」であるか、という社会的地位を基準とした区分法である。

4.3.1 心理的属性

4.3.1.1 親密関係

総 51 種類のシーンの中、「心理的属性」を基準とした場合、「親密関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 28 個であった（総シーン数比 55%）。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	17	11
比率	61%	39%

(表 7) 「親密関係」の方向別シーンの数と比率

4.3.1.2 疎遠関係

総 51 種類のシーンの中、「心理的属性」を基準とした場合、「疎遠関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 23 個であった（総シーン数比 45%）。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	6	17
比率	26%	74%

(表 8) 「疎遠関係」の方向別シーンの数と比率（総シーン数比 45%）

4.2.1.3 分析

「親密関係」では「ダ体→デスマス体」方向、「疎遠関係」では「デスマス体→ダ体」方向のスピーチレベルシフトが主に行われた。それは他の要因よりも、「親密関係」の話者はベースが「ダ体」である場合が多く、「疎遠関係」の話者はベースが「デスマス体」である場合が多いからであると思われる。

4.3.2 社会的属性

4.3.2.1 水平関係

総 51 種類のシーンの中、「社会的属性」を基準とした場合、「水平関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 32 個であった（総シーン数比 63%）。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	12	20
比率	36.5%	62.5%

(表 9) 「水平関係」の方向別シーンの数と比率

4.3.2.2 垂直関係

総 51 種類のシーンの中、「社会的属性」を基準とした場合、「垂直関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 19 個であった（総シーン数比 37%）。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	10	9
比率	53%	47%

(表 10) 「垂直関係」の方向別シーンの数と比率

4.3.2.3 分析

「社会的属性」に着目して観察を行った結果、「垂直関係」よりは「水平関係」でスピーチレベルシフトが多く行われることがわかった。垂直関係では比較的言葉使いを気にしない親子関係、兄弟関係等も存在するが、主に上司と部下の関係、先生と弟子の関係のように上下関係が確実な場合が多かった。このような関係での会話には社会的に決まった礼儀のような要素も影響するため、比較的簡単にスピーチレベルシフトが行われにくく、喧嘩のような特別な状況に限ってスピーチレベルシフトが行われる。それから、垂直関係より比較的初めて会った人が友達になるように、関係変化の余地が多い水平関係のほうがスピーチレベルシフトが起りやすいと思われる。

4.3.3 複合的属性

属性を基準として考える際、属性が両方存在する場合も考えられる。たとえば、親密でありながら水平関係である友達や疎遠で垂直関係である初めて会った直属上司等が考えられる。このように、今まで観察してきた社会的属性と心理的属性を複合させた基準で属性別観察を行う。

4.3.3.1 親密／水平関係

総 51 種類のシーンの中、「複合的属性」を基準とした場合、「親密／水平関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 20 個（総シーン数比 39%）であった。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	11	9
比率	55%	45%

(表 11) 「親密／水平関係」の方向別シーンの数と比率（総シーン数比 39%）

4.3.3.2 親密／垂直関係

総 51 種類のシーンの中、「複合的属性」を基準とした場合、「親密／垂直関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 20 個であった。（総シーン数比 18%）。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	8	1
比率	55%	45%

(表 12) 「親密／垂直関係」の方向別シーンの数と比率（総シーン数比 18%）

4.3.3.3 疎遠／水平関係

総 51 種類のシーンの中、「複合的属性」を基準とした場合、「疎遠／水平関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 20 個であった。（総シーン数比 24%）。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	1	12
比率	8%	82%

(表 13) 「疎遠／水平関係」の方向別シーンの数と比率（総シーン数比 24%）

4.3.3.4 疎遠／垂直関係

総 51 種類のシーンの中、「複合的属性」を基準とした場合、「疎遠／垂直関係」の話者同士の会話で行われたスピーチレベルシフトは 20 個（総シーン数比 19%）であった。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	4	6
比率	40%	60%

(表 14) 「疎遠／垂直関係」の方向別シーンの数と比率（総シーン数比 19%）

4.3.3.5 分析

「複合的属性」を観察した結果、「親密／水平関係」が 39%、「親密／垂直関係」が 18%、「疎遠／水平関係」が 24%、「疎遠／垂直関係」が 19%を占めていた。垂直関係よりは水平関係で、疎遠関係よりは親密関係でスピーチレベルシフトが活発に行われていた。

親密／水平関係であるほどスピーチレベルシフトが起りやすく、疎遠／垂直関係であるほどスピーチレベルシフトが起りにくいことが分かった。

4.3.4 話者の属性に関する総括的分析

以上、スピーチレベルシフトを話者の属性の観点からみてきた。「心理的属性」では「親密関係」である場合（55%）が「疎遠関係」（45%）である場合よりスピーチレベルシフトが頻繁に起り、「社会的属性」では「水平関係」である場合（63%）が「垂直関係」である場合（37%）よりスピーチレベルシフトがよく起っていることが分かった。

なお、心理的属性と社会的属性を結合させた「複合的属性」を「親密／水平」、「親密／垂直」、「疎遠／水平」、「疎遠／垂直」の四つのケースに設定して観察した結果、「親密／水平」の場合が 39%で一番多く見られた。これを見れば、親密関係であり、水平関係であるほど頻繁にスピーチレベルシフトが起ると分かる。他の項目はそれぞれ「親密／垂直関係」が 18%、「疎遠／水平関係」が 24%、「疎遠／垂直関係」が 19%を占めていた。

4.4 会話が行われる場面によるスピーチレベルシフトの分析

スピーチレベルシフトを場面という基準に着目して観察を行う。本稿では場面を日常会話、ふざけのように普段起り得る場面を「平常」の場面と、喧嘩、脅迫のように普段起らないような場面を「異常」の場面と設定した。

4.4.1 平常

分類基準	日常会話	ふざけ	指導	頼み
項目別シーン数	26	4	3	1
比率	76%	12%	9%	3%

(表 15) 「平常」の項目別シーンの数と比率 (総シーン数比 66%)

4.4.2 異常

総 51 種類のシーンの中、「異常」の場面に行われたスピーチレベルシフトは 17 個 (総シーン数比 34%) であった。

分類基準	喧嘩	脅威	誤解	叱り	緊急
項目別シーン数	7	3	4	1	2
比率	40%	18%	24%	6%	12%

(表 16) 「異常」の項目別シーンの数と比率 (総シーン数比 34%)

4.4.3 分析

「場面」を日常会話やふざけのように普段起り得る「平常」の場面と喧嘩、脅迫、誤解のようにあるきっかけがあってから起る「異常」の場面に分けて観察してみると、異常の場面より平常の場面に多くスピーチレベルシフトが起っていた。比率的にも、平常の場面 66%、異常の場面 34%で、差は大きかった。これは、場面の特性よりは、そもそも平常の場面が日常生活で普通に起っている状況であるから、スピーチレベルシフトが起り得る機会自体が多いという理由が一番影響していると思われる。

4.5 スピーチレベルシフトの継続性の分析

スピーチレベルシフトには一時的に行われる場合と恒常的に行われる場合がある。その「継続性」を基準として観察を行う。

4.5.1 一時的なスピーチレベルシフト

総 51 種類のシーンの中、「一時的」に行われたスピーチレベルシフトは 44 個であった (総シーン数比 86%)。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	20	24
比率	40%	60%

(表 17) 「一時的」なスピーチレベルシフトの方向別シーンの数と比率

4.5.2 恒常的なスピーチレベルシフト

総 51 種類のシーンの中、「恒常的」に行われたスピーチレベルシフトは 7 個であった (総シーン数比 14%)。

分類基準	ダ体→デスマス体	デスマス体→ダ体
項目別シーン数	1	6
比率	14%	86%

(表 18) 「恒常的」なスピーチレベルシフトの方向別シーンの数と比率

4.5.3 分析

スピーチレベルシフトを「継続性」の基準から観察すると、「一時的」なスピーチレベルシフトが 86%、「継続的」なスピーチレベルシフトが 14%であり、圧倒的に「一時的」のほうが多かった。話者同士が親しくなって「デスマス体」のベースを「ダ体」に変えるような場合を除けば、主にスピーチレベルシフトは一時的に行われることが分かった。

5. まとめ

以上の結果から、シナリオから観察できる日本語のスピーチレベルシフトの諸相は次ページの表 19 のようにまとめられる。

参考文献

- 足立さゆり(1995)「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』
拓殖大学留学生別科
- 陳文敏(2003)「同年代の初対面同士における会話に見られる「ダ体発生」へのシフト—生起し
やすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14
- 杉山ますよ(2000)「学生の討論におけるスピーチレベルシフト—丁寧体と普通体の現れ方—」
『別科論集』2、大東文化大学別科日本語研修課程
- 長嶺聖子(2008)「韓国語の「パンマル」と日本語の「ため口」の違いに関する一考察—待遇表
現の指導方法と関連して—」『琉球大学留学生センター紀要』5、琉球大学
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194
- 野元菊雄(2000)『敬語を使いこなす』講談社現代新書
- 日高水穂(2004)「普通体と丁寧体の混在による表現効果」『言語』33-11
- 日高水穂・伊藤美樹子(2007)「スピーチレベルシフトの表現効果」『シナリオ「12 人の優しい
日本人」を題材に』『教育文化学部研究概要 人文科学・社会科学』62、秋田大学
- 文化庁(2007)「敬語の指針」
- 文化庁文化教育部国語課(2005)「日本人の敬語意識」『国語に関する世論調査』
- 水谷信子(1989)「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69
- 三牧陽子(1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第 I 部
門 42-1、大阪教育大学
- 宮武かおり(2009)「コーパスに基づく言語学教育研究報告 No.1: 日本語会話のスピーチレベル

を扱う研究の概観」、東京外国語大学大学院

山下秀雄(1989)「日本語教育における初級と待遇表現」『日本語教育』69

정지윤(2006)「대본을 통해 본 일본어 대우표현의 연구 [台本を通じて見た日本語待遇表現
의 연구]」 壇国大学校教育大学院

신성이(2008)「드라마에 나타난 한·일 경어연구: 冬のソナタ 시나리오를 중심으로 [ドラマ
に現れた韓日敬語研究 : 冬のソナタシナリオを中心に]」、京畿大學校教育大学院

서상규(1996)「일본어의 높임법과 한국어교육 (日本語 の 敬語法 と
韓国語教育)」 『말 21』 延世大学韓国語語学堂

凡例		目的		場面		継続性		属性				
◎ 61%~ ○ 40~60% △ ~39% × 0%		(相手に) 伝達	(相手を) 動かす	平常	異常	一時的	継続的	心理		社会		
								親密	疎遠	水平	垂直	
目的	(相手に) 伝達			◎	△	◎	△	○	○	◎	△	
	(相手を) 動かす			○	○	◎	×	○	○	○	○	
場面	平常	◎	△			◎	△	◎	△	○	○	
	異常	◎	△			◎	△	○	○	○	○	
継続性	一時的	◎	△	◎	△			○	○	◎	△	
	継続的	◎	×	◎	△			◎	△	◎	△	
属性	心理	親密	◎	△	◎	△	◎	△				
		疎遠	◎	△	○	○	◎	△				
	社会	水平	◎	△	◎	△	◎	△				
		垂直	◎	△	○	○	◎	△				

(表 19) 스피어치레벨시프트의 발생頻度の総合的な整理表